

令和 4 年度 さいたま市立与野南中学校 学校だより

みなみかぜ



南風

臨時号 - 2

令和 5年 3月24日 発行

<http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp>

<学校教育目標> 進んで学ぶ生徒 心豊かな生徒 心身共に健康な生徒

考えることについて考える～新時代を前にして

校長 吉原 誠 士

今年も在校生による“卒業おめでとう企画”に力が入っていました。階段に仕掛けられた桜の絵画をはじめ、下級生一人ひとりからの心尽くしに卒業生が感動を覚えたことは間違いありません。企画段階で頭をひねり、日程に追われながら作業を進め、15日のお披露目に至ったのは立派なプロジェクトと言ってよく、与野南中学校の真骨頂として名物でもある創造的な活動です。携わった皆さん、お疲れさまでした。この中には職員チームのメッセージカードも掲げられ、私は「歩く前に考え 歩きながら考え 歩き終わってから考えよ」という、自分が日常の心得としている言葉を載せました。

「正解以外の答えには意味がない」という捉え方を正解主義と言います。一問一答式の問いかけには知識さえあれば解答を導き出すことが可能で、覚える努力の結果を発揮できればそれはそれで結構なことです。しかし、「自分の考えを述べよ」「(あることについて)説明せよ」との出題に対しては空欄のままで終わってしまう可能性があります。思考問題は難易度が高いからと解答を放棄する人もいます。その気持ちを察するに「誤答は恥」「自信がない」というところでしょうか。しかしそれに応じるかのような報道がありました。新時代のAIならばデータを与えさえすれば「コンピュータが対策を考えてくれる」というのです。すでに“優れた作文用ソフト”を使ってコンピュータに書かせた文章が増えていて、アメリカのある雑誌が新作募集を打ち切らざるを得なくなったこともニュースになりました。

「レポートが楽になる」「不得意な読書感想文も何とかなる」との言い分は笑い捨てにはできません。実は、機械に頼りきりになり、その維持のためにだけ人が存在するようになってしまう危険性は100年も前から心配され、そのことを「人間疎外」という言葉で表現していました。また、機械と人類との闘い・葛藤は、先日亡くなった漫画家の松本零士氏が得意としたテーマでしたし、主人公がコンピュータによる支配に抵抗する「ターミネーター」シリーズは皆もよく知っている映画でしょう。そこまで凄惨な状態は生まれなくとも、「正しいかどうかの判定」「理由の説明」「自分の考え」もコンピュータに依存するような時代になるのでしょうか。「電脳」によって「人の脳」がじわじわと弱められ、コンピュータが出力する“正解”に従うだけの人々が増えるのではないかと懸念しています。

卒業式のマスクをどうするかは、自分で考えて判断することにしてありました。マスクの装着について正解はありません。結局、ノーマスクの生徒は数名でしたが、それを攻撃する生徒もいませんでした。個々が熟慮しての、予定調和や同調圧力に縁のない判断を嬉しく思いました。一人一台端末が支給される中、これまでも「対面での会話によるコミュニケーション」や「五感を駆使して本物に触れること」を大事にするよう呼びかけてきました。さらなる“新時代”を控えて、ここに「一人ひとりが自分の脳で考え、最適解を導き出すこと」も加えることにします。「歩く前に考え 歩きながら考え 歩き終わってから考えよ」とは、「何をしても『事前』『事の進行中』『事後』と常に頭をはたらかせ続けよう」、つまり「計画」「実践」「反省」すべてに思考が伴うということです。考えることを止めるのは自分が自分であることを放棄するのに等しいでしょう。「PCはスペック以上のことはできないが、人間は能力以上の力を発揮する可能性を秘めている」と開き直ってもいいのではないのでしょうか。

1年間お世話になりました。ありがとうございました。

新年度も明るい与野南中学校、力がつく学校であることを祈念いたします。